

# 渡辺よしたかの戦争詠をめぐって

## — 歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品（中）その2 —

野口 周一<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学

### 【キーワード】

台湾 渡辺よしたか 戦争詠 『あぢさゐ』 『台湾』

### はじめに

渡辺よしたか（義孝）という歌人がいた。1898年（明治31）に熊本県天草に生まれ、9歳のとき基隆に渡り、やがて台南、台中と歩き、1926年9月（大正15）9月に台湾日日新報社社員として花蓮港支局の立ち上げとともに花蓮港に赴いた。同年（昭和1）暮れに「あぢさゐ」歌会を立ち上げ、翌27年（昭和2）9月に『あじさゐ』を創刊し、38年（昭和13）10月まで花蓮港の地にあった。しかし、戦雲が立ち込めるなか、43年（昭和18）6月をもって廃刊とし、歌誌『台湾』に合同した。

その後、日本の敗戦により台湾から夫人の郷里・群馬県富岡市に引き揚げ、同地において『あぢさゐ』を復刊した。ときに1948年（昭和23）4月のことであった。そして、1983年（昭和58）1月に逝去するまで歌の道に精進し、『あじさゐ』は同年2・3月号「渡辺よしたか追悼」をもって廃刊となった。そのとき、それは通巻388号にまで達していた。

「歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品（上）」（『湘北紀要』第29号、2009年。以下、本編（上）と略称

する）は資料整理を念頭におきながら、よしたかの生涯のうち、台湾時代を中心に再現し、その著作物を収集する作業の中間報告とした。「歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品（中）—その1—」（『湘北紀要』第30号、2010年。以下、本編（中）—その1—と略称する）はよしたかをめぐる岩満千恵、渡辺みどりの二人の女性について、それぞれ歌誌『創作』、俳誌『雲母』を紐解くことにより、千恵がその後の人生において作歌の才能を開花させたこと、みどりが飯田蛇笏をして「境涯の作家」と言わしめたことを論証した。

本稿においては、よしたかが戦時体制の進展のなかで戦争をどのように詠んでいったか、明らかにしていきたい。その戦争とは、従来「日中戦争」（当該期には「北支事変」、「支那事変」という）、「太平洋戦争」（当該期には「大東亜戦争」等の呼称がある）と別個に扱われていたが、その後「十五戦争」を経て、現在は「アジア・太平洋戦争」という呼称が一般的になっている。

また、本稿では戦争に関わる短歌を、仮に「戦争詠」と呼んでおくことにする。坪井秀人は浩瀚な労作『声の祝祭—日本近代詩と戦争—』（名古屋大学出版会、1997年）において、「日本の近代詩に〈戦争詩〉が独立したジャンルとして登場して

---

<連絡先>

野口 周一 noguchi@shohoku.ac.jp

くるのは、一九三〇年代から四五年にかけての中国・南方への日本帝国主義の侵略と米英との戦闘、いわゆる十五年戦争の時代であった」と述べ、私が仮に「戦争詠」と呼ぶ短歌群も広義には「戦争詩」であろう。そして坪井は、「そこで残されたおびただしい戦争詩はしかし、醜い残骸のままに放置され、整理もされず、事実上は闇に葬られてしまっている」と問題を提起する(158頁)。

私はその戦争詠を読み解くにあたり、手許にある歴史研究者の概説書を取捨選択して用いた。私も防衛庁防衛研修所戦史室編纂の『戦史叢書』(朝雲新聞社)を知らないわけではないが、その編纂過程において歴史研究者が参画しなかったという問題点を看過することはできない<sup>(1)</sup>。

なお、本文中の引用文について、仮名遣いは引用原文のまま、漢字旧字体は原則として新字体に改めた。

## 1. 『あぢさゐ』掲載の戦争詠

再説となるが、渡辺よしとかは台湾日日新報社花蓮港支局の立ち上げとともに、1926年(大正15)9月に同地に赴き、同年暮れに「あぢさゐ」歌会を始め、翌27年(昭和2)4月に歌誌『あぢさゐ』を創刊したのであった。同誌は43年(昭和18)6月に時局窮乏の折柄、廃刊となる(戦後復刊)。

『あぢさゐ』戦前版は、台湾大学図書館に第8巻6月号(1934年〈昭和9〉6月)から第15巻6月号(1941年〈昭和16〉6月)まで(途中欠号あり)、国立中央図書館台湾分館に第8巻4月号から第13巻11月号(1939年〈昭和14〉6月)まで、所蔵されている。なお日本近代文学館には第8巻4月号が一冊のみある。その中から、所謂戦争詠なるものを抽出していきたい。

### (1) 1935年(昭和10)

第9巻5月号に「日満皇室御交歓」と題して、

日の本にさくらの花のかがよへばすがしき蘭  
のかほりもぞ添ふ

東洋の若き帝し携ひて立たす世界に光りあたらし

とある。これは満州国皇帝溥儀の来日を詠ったものである。

さて、これが戦争詠に属するといえるだろうか。しかし、満州国建国の過程を考えるならば、それは日本の中国東北部への「侵略」の結果であり、その呼称は妥当である。すなわち、関東軍は参謀の石原莞爾を中心として、1931年(昭和6)9月18日、奉天郊外の柳条湖で南満州鉄道の線路を爆破し、これを中国軍の仕業として軍事行動を起こし、満州事変が始まった。翌32年(昭和7)になると関東軍は満州の主要地域を占領し、3月には清朝最後の皇帝溥儀を執政として、満州国の建国を宣言したのである。その理念として五族協和、王道楽土を掲げたものの、実態は満州国の軍事・内政とも完全に日本の支配に服し、中国本土から東北部を切り離しただけの植民地化であったことは自明であった。9月には日満議定書が結ばれ、日本は満州国を承認するという形式を踏んだ。そして34年(昭和9)3月1日、溥儀は皇帝となったのである。小林秀夫は『〈満州〉の歴史』(講談社、2008年)において、「溥儀が求めたものは清朝の復辟、つまりは清朝皇帝への道」、「関東軍が求めているものは満州国皇帝への道」と述べる(123頁)。

その満州帝国は、「年号は大同から康德へと改元され、蘭の花の〴〵御紋章、の制定、〴〵御容、(のち〴〵御真影、と改称)の下賜など、天皇制を模した帝政がつくられた」のである(江口圭一『十五年戦争の開幕』〈昭和の歴史 第4巻〉、小学館、1982年、276頁)。やがて皇帝溥儀に正式な訪日要請がなされた。波多野勝は『昭和天皇とラストエンペラー』

(草思社、2007年)において、「日満一体、日滿不可分を推進するための最上のセレモニーは両皇室の交流しかなかった」(68頁)として、日本は秩父宮差遣により溥儀の自尊心をくすぐり、溥儀から訪日応諾の言葉を引き出すのである(68-78頁)。一方、小林は「皇室と結ぶことで関東軍を牽制できるという溥儀の思惑と、皇室を通じて直に溥儀を領導できると踏んだ関東軍の、両者の思惑が、皇室への接近という共通項で結ばれた結果が溥儀の訪日だった」(125-126頁)という。

35年4月2日、溥儀は新京を出発、大連から日本が誇る最新鋭の戦艦比叡に乗り込んだ。4日東支那海洋上で、戦艦山城以下の連合艦隊70隻が溥儀を出迎え、その後土佐沖、三浦半島沖を經由して、6日朝横浜港に入港した。その際には海軍航空機98機が供覧飛行をする。そして出迎えの秩父宮とともに御召列車にて東京駅へ、プラットホームに待機していた天皇と握手を交わし、四頭立ての美しい儀装馬車に秩父宮と同乗し、宮城へ向った(波多野97-102頁、小林126-127頁)。翌7日付の『東京新聞』は「一国の元首の御来訪は実にわが国空前の盛儀で、昭和天皇は東京駅に進めたまい、蘭薫る国の皇帝陛下をお出迎えあらせられ、駅頭固い御握手をかわせたもうた。まさに皇国九千万同胞と盟邦三千万民衆の待望おかげりし歴史的な一瞬……東亜の平和を守る日満の礎石は厳として磐石のようにすえられた」と報じた(波多野106頁)。

贅言の感なきにしもあらずだが、ここで文部省の作成した『満州国皇帝陛下奉迎歌』を記録しておきたい(波多野84-85頁)。

一、大陸の風もしづまり／時は春、空もうららか／われら今、ああ嬉しくも／迎へまつる、満州国皇帝陛下 二、蘭かをる 花の御旗に／日章旗光交へて／まのあたり、ああ尊くも、／迎へまつる、満州国皇帝陛下 三、新興の国の栄は／東洋の平和のもとゐ／今日ここに、ああめでたくも

／迎へまつる、満州国皇帝陛下。

よしたかの上記2首は、まさにこの情景を切り取ったものである。

## (2) 1936年(昭和11)

この年は『あぢさゐ』創刊10年目であった。その節目として、6月にあぢさゐ歌会より『あけぼの』が刊行された。

それに先立ち、第10巻2月号には「軍縮会議」として、

うはべのみつくろふ軍縮会議など開くに及かず何のたはごと

策略をもてあそばざれまこともて相むかひなば道はひらけむ

あらかじめ思ひたりしが決裂に立ち到りしを悲しまめやも

策略をこれ事として軍縮に名にかかる会議あればと言ふ

軍縮を強ふるはつひに避けがたく迫れるものを悟るべからむ

とある。これは1936年1月15日、ロンドン海軍軍縮会議脱退を通告したことを詠ったものである。

1930年(昭和5)1月、ロンドン海軍軍縮会議を前にして、浜口雄幸首相は海軍軍縮に応じる方針を示した。軍縮は財政緊縮に寄与するだけでなく、外交面でも欧米との協調、中国との親善を進めることができたからである。しかし3月に同条約に調印したものの、批准されたのは10月、ついには11月14日浜口は東京駅ホームで狙撃されるにいたる。そして36年には、日本は第2次ロンドン海軍軍縮会議を脱退して、ロンドン条約が失効、日本は国際的に孤立するにいたるのである。

この間の経緯について、山室信一は満州国統治とからめて、「この時期、(満州国の一引用者)帝政実施によって日本の国策を円滑に遂行する必要性が強調されたのは『昭和十一年(一九三六年)



前後において危機百パーセントの国難を予想せらるる日本は少なくともその以前において日満造成の天業を不動の地位にまで進捗せしめ置く必要がある』（「満州国憲法制定に就いて」一九三三年八月）と筑紫熊七参議が切言したように、いわゆる一九三六年危機に対応するためであった。この一九三六年危機という主張はロンドン海軍軍縮条約のもとで日本の建艦状況が三六年に米英に対し劣勢に陥ること、一九三二年に始まったソ連の第二次五ヵ年計画が完成期に近づきその軍事力が強化されること、などによって日本に対する国際的脅威が最も高まるとみるものである」と述べる（『キメラ—満州国の肖像—』中央公論社、1993年、225-226頁）。さらに山室は「それは危機感を煽ることによって軍事力の増強と政治的発言権の拡大をはかる軍部のプロパガンダであったが」（226頁）と続けるが、多くの国民はそれに追従していくのである。よししたかもまたそうであった。

この2月号には「一月十八日台南二連隊軍旗奉迎」として、

ひとたびはつはものの手に縫はれけるあとだ  
にまたも破れはてにつつ  
ますらをやみ旗の前に殢れむとふるひたたむ

はむべなるかなや

あはれかも幾年月の雨風に尚紫のふかき房の  
いろ

高光る明治の帝定めます軍旗の房は御このみ  
らし

ともある。台南二連隊は台湾歩兵第二連隊といい【図版1】、ここに詠われた軍旗は、1907年（明治40）11月7日に授与されたものである（新人物往来社戦史室編『日本陸軍歩兵連隊』新人物往来社、1991年、315-316頁）。なお、軍旗の重要性は乃木希典が妻静子とともに明治天皇のあとを追って殉死した際の遺書からもわかる。すなわち「自分此度御跡ヲ追ヒ奉リ自殺候段恐レ入り候儀其罪ハ輕カラズ存ジ候、然ル処明治十年ノ役ニ於テ軍旗ヲ失ヒ其後死処得度ク心掛ケ候モ其機ヲ得ズ、皇恩ノ厚キニ浴シ今日迄過分ノ御優遇ヲ蒙リ、……」とある（隅谷三喜男『大日本帝国の試煉』〈日本の歴史 第22巻〉中央公論社、1966年、460-461頁）。

4月号には「内乱事件」として、

民族がより浄からむねがひありかかる相にあ  
らはれにけり

ゆゆしみとことには言へどいつの日かつひに  
来らむことにあらじか



【図版1】台湾歩兵第二連隊正門。森本暁美＋謝森展『台湾懐旧』（創意力文化事業公司、中華民國79年）434頁。



とある。この内乱事件とは、言わずと知れた二・二六事件である。

1936年2月26日、大雪の早朝、東京の陸軍第一師団の青年将校らに率いられた約1400名の兵隊が決起、彼らは首相官邸などを襲撃し、斎藤実内大臣、高橋是清大蔵大臣、渡辺錠太郎教育総監らを殺害、永田町一帯を占拠した。陸軍は一時的に混乱したが、側近を殺された天皇の怒りを買い、反乱軍の討伐へと進むのであった。

この事件については、「いままで、陸軍の皇道派と統制派の対立のなかで、北一輝の影響を受けた皇道派の青年将校らが農村の窮乏を訴えて起こしたと説明されてきた」のである（大門正克『戦争と戦後を生きる』〈全集 日本の歴史 第15巻〉小学館、2009年、65頁）。よしたかも、そのように考えていたことが読み取れる。

### (3) 1937年（昭和12）

この年の7月7日、七夕の夜、北平（北京）郊外の盧溝橋で日中両軍の小さな衝突があり、これがその後の全面的な日中戦争に発展していくのである。この盧溝橋はマルコ＝ポーロの『世界の叙述』（通称『東方見聞録』）にも記録されている石造り

の橋で、明代に装飾された獅子の欄干がいまは美しい。【図版2】

当時の内閣は近衛文麿を首班とするものであり、彼は英米との対立をおそれて宣戦布告はせず、これを「北支事変」と命名した。8月15日の政府声明では「支那軍の暴戾を膺懲し以て南京政府の反省を促す」、すなわち「暴支膺懲」声明を出した。

戦火が上海に波及し、両国が全面的な戦争状態に入った9月2日に、政府はこれらの事変の拡大によって「北支事変」を「支那事変」と改称した。「戦争」といわず「事変」で押し通したところに、この戦争の本質、すなわち侵略戦争であるという事実が表れている（藤原彰『日中全面戦争』〈昭和の歴史 第5巻〉小学館、1982年、14-16頁）。

第11巻1月号には、「桑田君の入営を送る」と題した2首がある。

ひむがしのアジヤの土をとことはに安からし  
めよ行けやますらを

大み国ことしげき秋召されゆく責重ければ悟  
りゆくべし

巻末の「編集室」には「桑田君は八日台南二連隊へ向け出発した」とあり、桑田友竹の1月8日の入営を伝えている。



【図版2】日中戦争勃発の地、盧溝橋を北京師範大学留学中の三学生と訪ねて（2000年2月27日）。  
左より、河内希衣さん、小須田千春さん、金子真理さん。

9月号には

動乱の上海を思ひゐる緑に黄楊のにはひのい  
かにやさしき

スペインと言ひまた支那と言ひ人類のおろけ  
さ遂に熄まざりけらし

がある。この「支那」の「おろけさ」は「暴支膺懲」  
を言い換えたものである。

10月号には、「伝書鳩、軍馬」と題して3首あがっ  
ている。

谷深く墜ちゆく馬のかすかなる悲鳴は耳につ  
きてゐるとぞ

鶯が棲む荒野をかけり伝書鳩つばさ喰ひ切ら  
れ務れ果せる

上海の大火をくぐり双つばさ焼かれて帰る鳩  
もありちふ

さて、武市銀治郎の『富国強馬』（講談社、1999  
年）には、「事変勃発から終戦までに軍馬をもっ  
とも多く用いたのは『支那方面』であり、その  
総出馬数は二十四万三百十九頭で、八年間に  
十一万六千百十一頭を消耗し、終戦時残存馬数は  
十二万四千二百八頭であった」（195頁）とあり、  
「臨時動員で編成された某山砲師団は、北海道の  
徴発馬約一万頭からなり、大急ぎで天津に集合、  
直ちに太原南方の山地に前進を命ぜられた。風雨  
を冒し泥濘と戦い、二週間不眠不休で前進を続け  
た結果、一万頭の徴発馬はほとんど死んでしまい」  
（182頁）という実態も記されている。

この第1首の歌から想起するのは、宮柊二の  
「暗谷に昨夜墜ちゆきし馬思へば朝光ぬちに寄り  
合いし馬」の歌である（『山西省』古径社、1949年、  
47頁）。

戦没軍馬慰霊祭連絡協議会編『戦没軍馬鎮魂録』  
（偕行社、1992年）の「序」は、千葉県習志野市に  
ある「軍馬慰霊之碑」の裏面に刻まれている撰文  
を訓読したもの、すなわち「夫レ馬ノ性タルヤ従  
順ニシテ能ク人ニ馴レ重キヲ任イテ遠キニ致シ以

テ天下ニ利シ斃レテ後已ムノ概有リ 是ノ故ニ古  
来軍旅ニ重用セラル 百戦沙場ニ人ト心ヲ一ニシ  
テ縦横ニ馳突シ汗血地ニ塗ミレ大功ヲ建ツ真ニ偉  
ト謂ウベキ也 而シテ其ノ斃ルルヤ人絶エテ弔ウ  
コト無ク遊魂帰スル処ヲ知ラズ 嗚呼其ノ末路之  
悲惨ナルコト何ゾ夫レ斯克ノ如キカ」に始まる。  
なお、この碑の揮毫者は秋山好古であるという。

この書を紐解くと、各地の碑が写真とともに収  
められ、「軍馬・軍犬・軍鳩」と三者を並べて霊を  
悼む碑も少なからず存在することがわかる。

#### (4) 1938年（昭和13）

1937年（昭和12）12月13日、日本軍は南京を占  
領するものの、国民政府は南京から漢口、さらに  
奥地の重慶に退いてあくまで抗戦を続けたので、  
日中戦争は泥沼化の様相を呈していった。

そこで日本側は各地に傀儡政権を樹立する方式  
に切り替え、38年1月には近衛文麿首相は「国民  
政府を対手にせず」と声明し、国民政府との交渉  
による和平の可能性をみずから断ち切るのであつ  
た。11月には戦争の目的が日・満・華3国連合に  
よる東亜新秩序建設にあることを表明するので  
あつた。

その第12巻6・7月合併号に、「英樹に」と題して、

吾をさへ光と仰ぎ頼めつつ奮ひ立ちてぞ死地  
におもむく

うつし世にはかなきわれを頼みつつ生くとふ  
ことはかたじけなしや

ああ君が命からなる頼みにぞこたふあたいを  
うら歎くかも

吾を信じ行くとふ君がひたごころたとへ錯覚  
なりとてもよし

とあり、よししたかは「編集後記」に「南城英樹君目  
下山西省を舞台とし更生の意気猛然と奮闘中なり  
同人一同更生の若者の前途を見守り愛護祝福の祈  
りを送りたい」と記す。この南城英樹は平井三恭

のことであり（『あぢさゐ』第8巻5月号、1934年〈昭和9〉、20頁）、戦後もよしたかと密接な関わりをもつ人物である。なお「北支那方面軍」の編成は、前年の7月11日、北京で現地の支那駐屯軍と第29軍との間に停戦協定が成立し、盧溝橋事件が局地的解決に向かうかにみえた、まさにそのとき近衛文麿内閣は、閣議で華北派兵を決定し、戦争拡大への道へと突き進んだのであった（藤原彰『日中全面戦争』76頁）。

8月号には「日支事変一週<sup>ママ</sup>年記念」と題して、

暴戾支那の飽くこと知らぬ愚けさは且つ憐れ  
めど撃たでやまめや

とあり、「三國一朗が弟をはやしたてた『ヨー  
チョー』である」（大門正克『戦争と戦後を生きる』  
111頁）ごとく、よしたかも「暴戾支那」を「膺懲  
すべし」と考えていたのである。

また、「南昌爆撃の勇士」と題して、

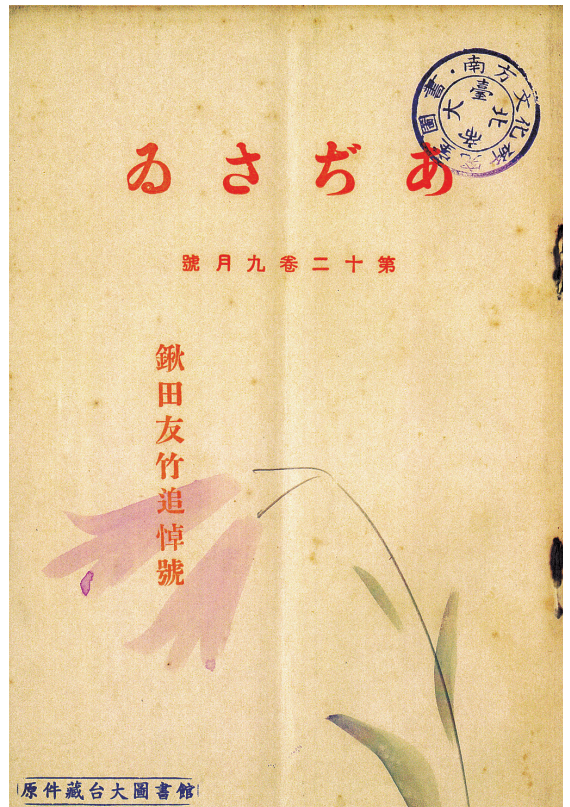
何たる豪胆何たる意表の事するぞ着陸の上敵  
機焼き払ふ

命惜しまぬ業も程度を越へぬれば「やったぞ」  
と言ふ笑ひあるのみ

事あまり敵の意表に出でたれば手を拱きてゐ  
たりけむかも

とある。『戦史叢書』によると、「六月二十六日南昌攻撃」、「七月四日南昌上空空中戦」、「七月十八日南昌飛行場着陸攻撃」とあり、よしたかの歌は7月18日の記録に合致する。そこに「十五空艦戦六、艦爆一四、艦攻五をもって南昌飛行場を空襲、新旧飛行場を爆撃したのち、小川正一中尉機以下四機の艦爆は新飛行場に強行着陸し、残存敵機五機を焼却し引揚げた」と記録されている（『中国方面海軍作戦〈2〉—昭和十三年四月以降—』朝雲新聞社、1975年、71頁）。

9月号は「<sup>ママ</sup>鉄田友竹追悼号」であり、彼の思い出が記され、「挽歌」の章が設けられている【図版3】。これは前述の桑田友竹の戦死を悼むものであった。



【図版3】『あぢさゐ』第20巻9月号「鉄田友竹追悼号」。

思い出の記は、彼の叔母と思しき野口美咲が「友竹の思出」と題するものである。叔母は友竹からの手紙を引きつつ偲ぶのである。その中の一節に、「○○敵前上陸に当り分隊長外多数の戦友を失ひ其後自分が代つて分隊長となり進んで居ます。今は此の殞れし戦友に対する恨みと憤り以外に何者ありません。水筒の泥臭い水をすすり合った二三時間前の友が血潮にもがいて居るさまをちらと見しまためらふ暇もなく弾雨をついて去つてしまった」とある（家永三郎「戦争における人間性の破壊」『太平洋戦争』所収、岩波書店、1968年、参照）。戦場では鬼神のごとく戦った友竹も、日常生活においては「忙しい店の手伝ひに日々黙々として働くのみの彼を見ては、他の店員も常に励まされる如く皆譲り合つて居た。段々と慣れて来る



にしたがひ口数の少ない純朴な彼は得意先の信用あつく却つて主人直接の応対より彼を好むもの様であつた」。「月に一度の公休日も『友竹さん今日は何処かへ連れて行つてよ』と朝から子供につきまちはれる子供好きな彼は『ああ仕方がない』と迷惑ながらも皆引連れて出で行く。時折の映画見物以外に水曜毎の歌会のみが彼に取りて唯一の楽しい会合であり、それも仕事の都合上出られぬ夜が度々あつた」とあり、精励な仕事ぶり、子どもに慕われる優しさが活写されている。

「挽歌」の冒頭にある、よしたかの歌11首のうち7首をあげる。

あぢさみに載りにし歌は五十首に足らぬえに  
しを歎かさらむや  
送<sup>(ママ)</sup>りれしうばらの花はにほひつつ若き感傷こ  
もらふものを  
めとらせず死なせしのみぞくりかえし愚痴出  
づらむ親にとりては  
取引先の本島人すら君がため弔電寄する思は  
ざらむや  
一弾にすべなかりける玉の緒の抗ひ激ちたり  
したまゆら  
君もまたいくたりの兵を一弾殪して刺して君  
も撃れし  
たたかひは止みて除隊となりぬれど尚支那に  
とどまりゐると思はぬ

よしたかもまた若き弟子の戦死を歎き悲しむのである。「めとらせず死なせし」云々の歌から想起することは、よしたかと同棲していたみどりの句である。みどりは『雲母』第24巻〈昭和13年〉第12号に「戦死者の童貞は悲し 二句」として、

君がため秋白日の香柱かむ

白日に照る白木槿清しとも

と詠んだ。この二句を、飯田蛇笏は「この心境には詩人としてのかぎりない同情と、実におほらかなる明月のやうな詩的純情の慈悲がある」と、ま

さに激賞したのである（『批判鑑賞の余言』、『雲母』第24巻第12号）。みどりは句作を始めて約十数年、この間十年の長きにわたるスランプを脱して、蛇笏からこのような高い評価を得たのであった。みどりもまた、桑田の戦死をよしたかとともに悲しんだのである。

また「本島人」云々は、桑田が日本統治下の台湾人からも愛されていたということである。

#### (5) 1940年(昭和15)

第14巻5月号に「年始所懐」として、

アメリカの大建艦は何すれぞ太平洋の波は立  
たせじ  
物にのみ立ちたる国が何すれぞ太平洋の波は  
立たせじ

とある。この歌は日本に対するアメリカの海軍拡張策を詠ったものである。

これは下院議員で下院海軍小委員会議長のカール・ヴィンソンによる海軍拡張法に基づくものであった。サミュエル・モリソン著『モリソンの太平洋海戦史』（光人社、2003年）の「ルーズベルト政権下の海軍増強（一九三三年～一九三九年）」に拠ると、当時の状況は「日本は海軍軍縮条約から脱退したが、イギリスもアメリカも同条約に拘束されていると認識していた。しかし、アメリカ海軍兵力はあまりにも低下してしまったから、条約が認めた兵力まで増強するには、大きなギャップがあった。ルーズベルト大統領、ビンソン議員、そして指導的な海軍提督たちが繰り返し行った助言や提言に、議会はやっと反応を示しはじめた」（46頁）、「一九三三年六月十六日の国家産業復興法—その公然の目的は失業を緩和すること—の自然の結果として、久しぶりの新艦建造が承認されたのである。これで、『ブルックリン』級軽巡洋艦、『クレブーン』級駆逐艦、航空母艦『エンタープライズ』と『ヨークタウン』、そして潜水艦四隻の建

造がスタートしたのである」(46-47頁)が、建艦がなかった10年間に海軍からの受注に依存していた造船所は倒産し、設計家、製図工、熟練工は転職等していたので、「最初の『条約型一万トン級』重巡洋艦は、『ニューオーリンズ』級で、五隻の建造が五年前に承認されたが、艦隊に就役したのは一九三四年であった」(47頁)。また「一九三五年から一九四〇年にかけて、『アトランタ』級の対空巡洋艦が設計され、掃海艇を含む各種の艦隊補助艦艇が設計段階から建造段階へ進んだ」(47頁)のであった。

さて1939年(昭和14)9月1日、ドイツ軍がポーランドへの侵略を開始すると、3日英仏は対独宣戦布告し、ここに第二次世界大戦が始まった。40年(昭和15)4月にドイツがヨーロッパ西部戦線で圧勝し、6月にはフランスがドイツに降伏する。この「ドイツの目覚しい進撃によってにわかに強まったのが南進論である。南進論にはイギリス領ビルマ―フランス領インドシナ―中国雲南を通して華南に流れる英米の軍需物資の蒋介石支援ルート、いわゆる援蒋ルートを遮断するという目的があった」のであり(『アジア・太平洋戦争』165頁)、「日本の南進行為に対してアメリカは7月に石油・屑鉄の輸出許可制、航空機ガソリンの対日禁輸を実施し、9月23日の仏印武力進駐の三日後には屑鉄の全面禁輸を行った」(同書166頁)。

一方、近衛内閣は成立直後から、南方進出とともに「速やかに独伊との政治的結束を強化」することを定めていた。その結果、9月27日に日独伊三国同盟が締結されたのである。この米英を仮想敵国としたこの軍事同盟は、日米間の対立を決定的なものにしていく。

それを受けて、14巻11月号(40年12月発行)から、「戦時新体制版」と大きく銘打つようになるのである【図版4】。

よしたかは巻頭言において、「時も時、皇紀



【図版4】『あざさる』第14巻11月号「戦時新体制版」。

二千六百年、祖国は乾坤一擲肇国の理想顕現に国家総力を挙げて邁進してゐる。われら同胞常に戦場に身命を賭すべき緊迫の情熱をもつて、この飛躍、この創造の祖国の大業に協力翼賛せねばならぬ」と説き起こし、「爆弾を投げる者のみが戦士ではない。吾々は歌人として国家の文化的方面への全幅的支持をなさねばならない」、「即ち歌は歌道は日本精神の母体であり、文化創造の淵源である、粹然凝りなす歌の至純の発露こそ日本文化の一切を創り出した原動である。日本精神の根源は歌にある」、「即ち歌人たるものこの世界動乱の中にあつて、国民各自の個性の中に醇乎として燦然たるものを築き、以て国民精神の基礎たる確固不動の自我を正視し、高揚するといふ吾ら不断の意識を茲に更めて再言し以て、短歌精進の上に戦時体制

の意識を明徴しやうとするものである」と高らかに宣言するのである。

その「後記」には、「本集からご覧の通りの体裁とし、戦時体制版と銘して、国家が要求する物の節約に添ふこととした」とある。そして「従つて発表量は極度に厳選する」として、「十五年組の古参や中堅組のもの二十数名に激をなし、向ふ六ヶ月間の欠詠なしを固く申合した、結果十月号に古顔の並んだこと御覚の通りである」、「第一回の誓約違反者、木蓮、久雄、寅助、きく、静江の元老連であった」ともあり、よしたかの作歌と『あぢさゐ』発行への情熱は熱いものがある。

この号には「英彦に逢ひまさに逢ふ」と題して、12首が掲載されている。弟子の瓜生英彦、寺山まさるを訪ねて台南に赴いたのである。よしたかの弟子を思う気持ちは、

いふべかる事ありけめど英彦にまさに逢ひしことのみに足る

汽車の窓に遠ぞく顔は泣き顔に見えて女々しくわがなりにけり

に表れている。その歌に続いて、

事変下の台南公園は金亀樹のしげり荒びし木々の下草

傷病兵無聊にボート漕ぎ遊ぶ公園の池水錆びすさぶ

とあり、戦争の余波が台湾の古都である台南にまで及んでいることがわかる【図版5】。



【図版5】台南公園。前掲『台湾懐旧』70頁。

## (6) 1941年(昭和16)

1940年(昭和15)11月、野村吉三郎海軍大將が駐米大使に任命され、41年2月からアメリカ大統領ルーズベルトおよび国務長官ハルと折衝を開始した。このころアメリカは、すでにヨーロッパ戦線においてドイツを主敵として打倒したあと日本に対応することを決めていたのである。

第15巻2月号(昭和16年3月発行)は、巻頭によしたかの「浅春雑記」が二頁半にわたって掲載されている。ここでは、時局に鑑みて「かかる際、吾々は日本人としての真個の価値に立ち勇往邁進すべきである。邁進せんとするには、まづ吾々は自ら立つて進むべき脚下を確乎として踏みしめねばならぬ。それは何であるか、吾々自ら真実なる自我を見つめ、おのれの生活をしかと把握した精神力の統制を持つことである」と説き、「即ち遵奉する歌の心を持つことである。吾々は常々不断に歌の道こそおのれを最も正しきに導き建設してゆく道と信じてゐる筈である。ましてこの道は日本精神文化の一切の根源である。その文化の基調であると信じてゐるのではないか、少くも吾々はその点を目ざし強調して来たのであった」と激を飛ばすのである。

よしたかは、この号に14首載せているが、その最初の2首、

何ものにも抗ひごころ壮んにていちづなりにし時すぎにけむ

到りけるよはひうべなふべかるらむ従ひがたきものの借みつ

である。よしたかは何に抗い、従い難きものとは何であったのだろうか。

6月号には「憤激」と題した19首がある。まず最初の5首をあげると、

論らふ時にはあらず比律賓制へおほせばあがきなるまじ

共栄圏打建てゆかむわが<sup>たか</sup>崇き正義をさへに敢



てなじるか

碧き目の鼻柱今ぞくちくべしほしいまなる  
支配許さず

物をのみ頼むあめりかはたましひにいくばく  
頼む抛りどころある

いくさする身振りのみするあめりかに欠けた  
ものの在るを識らざる

となる。「比律賓」はフィリピンのことであり、大東亜「共栄圏」という語句が初めて登場するのは、40年（昭和15）8月1日に松岡洋右外相が7月に閣議決定した「基本国策要綱」を説明した談話の中であった。松岡は「八紘を一字とする肇国の大精神に基き皇国を核心とし日満支の強固なる結合を根幹とする大東亜の新秩序を建設する」とぶちあげたのである（森武麿『アジア・太平洋戦争』〈日本の歴史 第20巻〉集英社、1993年、244頁）。よしたかもまた素直に共栄圏構想に従うのである。

よしたかは上記の歌に続き、

みづからのものをたしかに持ちもせでみ国の  
役に何ぞ立つべき

国をあげたたかへる時かかる時おのれに深く  
立つべかりける

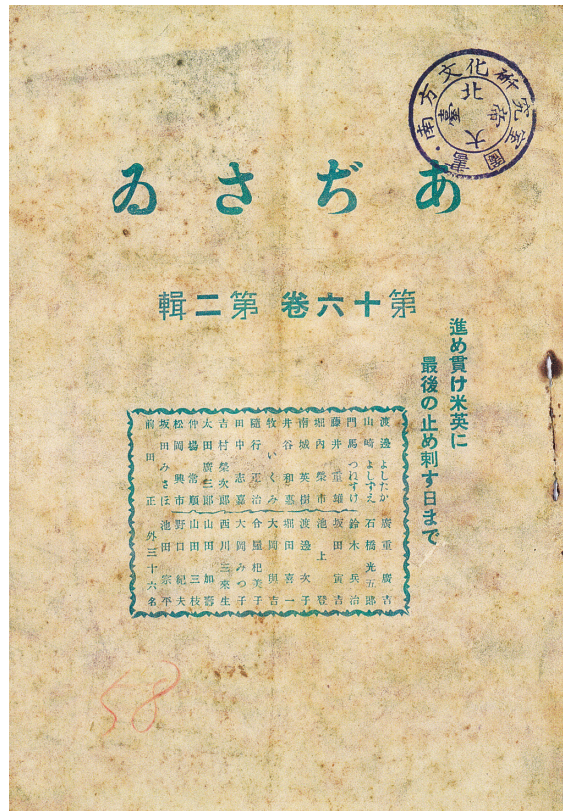
と詠う。多くの国民と同じ視点である。

なお、この年は4月13日に日ソ中立条約が結ばれ、日本の南進策が明確になることにより対米関係は悪化の一途をたどる。その後の日米交渉については割愛するが、ついに12月8日に日本軍の真珠湾奇襲攻撃にいたるのである。

## (7) 1942年（昭和17）

後述するが、前年12月には8日の真珠湾奇襲攻撃、マレー半島上陸、10日にマレー沖海戦、等々の局面が展開されていた。

その意気をうけて、第16巻第2集は、表紙に「進め貫け米英に 最後の止め刺す日まで」という文言が記されるにいたる【図版6】。



【図版6】『あぢさゐ』第16巻第2輯「進め貫け米英に最後の止め刺す日まで」。

しかし、この号に寄せたよしたかの歌は「関山越遊草」と題する、よしたかが得意とする叙景歌である。

## 2. 『台湾』掲載の戦争詠

『台湾』は來台した齊藤勇が創めたもので、第1巻第1号（1940年〈昭和15〉4月）から第6巻第1号（1945年〈昭和20〉2月）まで刊行された。この間の経緯については、井東襄著『大戦中に於ける台湾の短歌—斎藤勇を中心として—』（近代文芸社、1998年）に詳しい。

よしたかは、『あぢさゐ』を廃刊として、この『台湾』に合流するのである。その経緯について、

詳細な説明はすでに本編（上）で述べたので割愛するが、要はよしたかの当局に対する憤懣と斎藤の「大同団結」という思惑が合致したものである。従って、『台湾』におけるよしたかの立場は賓客であったことがわかる。

#### (1) 1941年（昭和16）

第2巻第1号の巻頭を「年頭言志」と題した、

みいくさはいつとせの春かがやかに二千六百  
一年の春

みんなみに<sup>の</sup>伸さむ<sup>ど</sup>踏み<sup>と</sup>処の台湾の責の重きを  
まさに負ふべし

まなじりをあげて望めばみんなみを圧へて世界  
鎮むるの時

み国なる不二のみ山と新高のと双つ並み立ち  
ゆるがざらめや

日の本を八重潮めぐりさやぐとも総力戦の備  
へゆるがず

といった南進策を詠った5首より始める。

第5号には「三月十三日日ソ中立条約締結成立」とした5首がある。日本は1940年（昭和15）に日独伊三国同盟を締結し、さらにその提携を強化するために松岡洋右外相はドイツ、イタリア歴訪の帰途、モスクワで日ソ中立条約を結んだのである（41年）。その松岡について、半藤一利は「唯我独尊、自信家、強硬な反英米派」と形容し、「彼は、アメリカの世界戦略に日本は引き回されている、アメリカと対等の立場で外交を展開するためには日独伊三国同盟はもちろんのこと、さらに『日独伊ソ』の四国の枢軸で協定し、日本の国際的地位を上げ、毅然として振舞う以外に方法はない、独ソ不可侵条約が結ばれている今がそのチャンスである、と明言していました。要するに、日独伊ソの四国で臨めば英米と対等にやりあえる、という強烈な意見の持ち主だったのです」と述べている（『昭和史1926～1945』平凡社、2004年、277頁）。

3首をあげる。

わが目ざす東亜栄えかくて泰し肚をもて当る  
外交を見よ

一国の大きな覚悟を身ひとつに当り砕くる人  
間松岡のまこと

大み心いかに晴れさせ給ひけむ松岡がため杯<sup>つき</sup>  
をあげ給ふらむ

よしたかもまた、日ソ中立条約によって後顧の憂えなく南進策をとることができることを素直に喜び、立役者松岡に杯を上げるのである。

#### (2) 1942年（昭和17）

第3巻第1号には、「戦勝讃歌一大東亜戦争に寄す」11首が堂々と掲載される。3首をあげる。

一弾必中決死のいのち燃えたちて何ぞとどめ  
む何ぞとどめむ

今こそは人類の敵はふらむといかりは燃えて  
魚雷投下す

米英のおごりたかぶり一瞬に木葉<sup>マフ</sup>微塵のいき  
どほりこれ

これは真珠湾攻撃の模様を詠ったものである。日米開戦は第一撃を奇襲で始めることとし、日本の連合艦隊は大型航空母艦6隻で千島列島の<sup>エトロフ</sup>択捉島の<sup>ヒトカッブ</sup>単冠湾を出発し、北から真珠湾に近づいた。日本時間で12月8日午前3時20分に攻撃を開始した。アメリカ側の被害を『ニミッツの太平洋海戦史』（恒文社、1975年）に拠って述べると、「この攻撃の初めに、『アリゾナ』に数個の魚雷と爆弾が命中した。一個の爆弾が前部弾薬庫内で爆発し、燃えさかる重油でおおわれた『アリゾナ』は急速に沈没し、1000名以上の乗組員が艦と運命をとみにした」、「戦艦『オクラホマ』は、攻撃の初期に三本の命中魚雷を受け、ただちに転覆し始めた」、「戦艦『ウエスト・ヴァージニア』も、攻撃の初めに魚雷を受けたが、速やかな排水作業によって転覆をまぬがれた」、「戦艦『テネシー』には三個の

爆弾が命中し、戦艦『アリゾナ』の炎上する重油で危険にさらされたが、軽い損傷にとどまった。戦艦『マリーランド』は二個の爆弾を受けただけであった。戦艦『カリフォルニア』は、単艦で停泊していた。同艦には日本の魚雷と一個の爆弾が命中し、そののち艦首を上にして真珠湾の海底に着底した」(21-22頁)となる。

第2号は「大東亜戦争と短歌（評論）」という特集と、「大東亜戦頌歌」と題する37名による競作がある。よしたかの歌10首のうち3首をあげる。

をのれらが利にのみ走る奴らをば烏合の象と  
共に視ざらむ  
民主主義国家壊しゆく大いなる哀れとどめむ  
歴史繰らるる  
病院船攻撃せるは許されずかかるたぐひを繰  
り返し来し

第5号にはシンガポール攻略に関わる歌5首がある。2首をあげる。

あなあはれ亡き魂魄もシンガポールのみ空に  
つどひ哭きていまさむ  
大君のみむねおもへば祝杯の酒はつかえて泪  
あふるる

林三郎著『太平洋戦争陸戦概史』（岩波書店、1951年）には、日本軍の真珠湾奇襲攻撃の成功によって「日本陸軍の南方第一段作戦は米主力艦隊に顧慮することなく、順調に発動できるに至った」、その狙いは東アジアのイギリスの根拠地を覆滅することにあり、「十二月八日、第二十五軍の先遣兵团は計画通り航空部隊の緊密な協力の下にマライ半島東海岸のシンガラおよびコタバルに上陸した。十日には海軍航空部隊は英東洋艦隊主力を壊滅してしまったので、第二十五軍の主力は安んじて上陸できるに至った。かくて、軍主力は上陸すると直ちにシンガポールを目指して快速進撃を開始し、十二月二十八日にはイボを、ついで三十一日にはクワンタンを奪取し、更にその余勢

を駆って昭和十七年一月三十一日にはジョホールをも占領した。続いて二月八日、シンガポール島に上陸し、同十五日これを完全に占領した。降伏した英軍は約十万であった」(56-57頁)とある。日本が「英東洋艦隊主力を壊滅」したのはマレー沖海戦であり(41年12月10日)、東洋一の大要塞と信じられていたシンガポールも日本が占領したのであった(42年2月15日)。

第7号には「珊瑚海戦果」7首がある。

おどかしの道具のひとつサトガも珊瑚海に  
ぞあへなかりけり  
あさみどりさつきの空に刷く雲のわが<sup>はつくに</sup>肇国の  
ねがひさやけし

珊瑚海海戦は日米間最初の航空母艦相互の海戦と位置づけられている。日本軍の目的は42年5月10日に海路からポートモレスビー（ニューギニア東南部にある連合国軍の拠点）を攻略することであり、小型空母1隻、重巡2隻を基幹とする艦隊が、輸送船12隻に分乗した陸海軍部隊を護衛してラバウルを出撃した。また大型空母2隻、重巡2隻を基幹とする機動部隊がトラックから出撃して支援に当たった。アメリカ軍は日本軍の企図を暗号解読により察知し、大型空母2隻、重巡6隻を珊瑚海に配備した。7日から8日朝にかけて戦闘があり、日本側の被害は空母祥鳳撃沈、空母翔鶴損傷、アメリカ側は空母レキシントン沈没、ヨークタウン損傷であった。戦術的には日本がやや有利、戦略的には日本の失敗、ポートモレスビー攻略部隊は目的地に達しないで引き揚げねばならなかった。よしたかの詠むサトガは1月に受けた魚雷による損傷の修理のためシアトル近くの海軍工廠にあり、戦場にはいなかった(『ニミッツの太平洋海戦史』49-60頁)。ただレキシントンをサトガ型と理解すれば誤りとはいえない(高木惣吉『太平洋海戦史』、岩波書店、1949年、52頁)。

第12号は「大東亜戦争歌の諸相」という特集の



もと、よしたかは「戦争詠感銘歌」をものし、「大東亜戦歌」には10首を寄せている。3首をあげる。

おほいなるものに目覚めよ地のへにわれらひととの睦みをぞ見む

虐げの年久しくて衰ふる東亜の民を庇ひてぞ立つ

精神の絶えてたふときものをさへ物として見る世界観去れ

これは、まさに「大東亜決戦の歌」である。シンガポール陥落の「大戦果もさることながら、国民の心理を爆発させたもう一つの理論的な秘密は、政府が唱える『大東亜共栄圏建設』のための『聖戦』という大義名分が、国民にアピールしたからである。長年にわたり過酷な植民地支配をつづけてきた欧米列強をアジアから駆逐し、日本が盟主となってアジア人のアジアを建設するのだという大アジア主義の主張は、欧米人にたいする劣等感と近隣のアジア諸民族への優越感を共有していた多くの国民の自尊心をくすぐるのにもってこいの理論であった」といえる(木坂順一郎『太平洋戦争』〈昭和の歴史 第7巻〉小学館、1982年、67頁)。

### (3) 1943年(昭和18)

第4巻第1号に、よしたかは「新作愛国百首」を載せる。相変わらず精力的な創作意欲である。若い頃は一ヵ月に一千首を詠んだという(立川三夫「渡辺よしたか論一覚え書き」『台湾』第2巻第4号、10頁)。

荒みたま爆ぜてしづきてひととせはすぎしハワイの海もこほしき

ウエルズに自爆する土に頒布<sup>ひふ</sup>ふりし<sup>きかん</sup>壮烈なるさま今に痛まゆ

大戦果たたふる迄もあらばこそ第三次ソロモン海のかちどき

アリゾナの砲塔吹きとぶすさまじさ神のみいかりかくばかりなり

目の前に地雷に<sup>ふ</sup>焼かれゆく<sup>とも</sup>戦友を乗り越えて得しシンガポールぞ

しこ草とよばれたりける高砂族諸君も今は大みたからぞ

ここでは地名や戦艦名等が詠われているものを上げてみたが、よしたからしさが表れた歌とは到底いえない。

「ウエルズ」は開戦から二日後、すなわち41年12月10日、海軍航空隊によって撃沈されたイギリス東洋艦隊の新鋭戦艦プリンス・オブ・ウェールズのことである(マレー沖海戦)。

「第三次ソロモン」海戦は1942年11月12日から14日にかけて戦われ、ガダルカナル島の攻防をめぐるものであった。これはミッドウェー海戦(6月5日～7日)の大敗北後、ガダルカナル島周辺海域での第一次ソロモン海戦(8月8日)、第二次ソロモン海戦(8月24日)後のことである。ここで日本は初めて高速戦艦比叟と霧島を失い、連合国軍は「この海戦を機に、制空権だけでなく制海権もほぼ手中におさめるにいたった」のである(『太平洋戦争』125-126頁)。

「しこ草」は醜草であり、台湾における先住民族である「高砂族」がどのような地位におかれていたかを物語るものである<sup>(2)</sup>。戴國輝は『満州事変』以降一段と軍国主義に傾斜して行く日本の全体制の枠の中で当局は漢族系台湾人に対すると同様、アメと鞭政策を高山族向けにも強化していった、いわゆる山地における皇民化運動(懐柔、籠絡)が強力に推進される。いったん太平洋戦争が勃発したらしたで、当局は『民族の誇り』を失った若い世代をば、彼らの屈折した心理を巧みに逆操作して高砂族義勇隊という名の侵略の尖兵に仕立て上げ活用するのだった。この心理的操作と虚構の栄光の創作、さらには被抑圧者である高山族に、新しい被抑圧者をつくり上げることで高山族のエネルギーを結果的には転嫁させたと理解でき

る」と厳しく指弾する（「霧社蜂起事件の概要と研究の今日的意味」『台湾霧者蜂起事件—研究と資料—』所収、社会思想社、1981年、34頁）。それゆえ、私はよしたかが彼らを「今は大みたからぞ」と詠むことに得心がいかない。

第7号は表紙に「歌と文 山本元帥頌」、「痛憤アッツ島」とある【図版7】。この年の4月、連合艦隊司令長官山本五十六がソロモン諸島のブーゲンビル島上空で撃墜され、国民は大きな衝撃を受けていた。そもそも、なぜこのような事態が起こったのか。ガダルカナル島作戦が日本軍の完敗に終わったのちも、太平洋の主戦場は依然として中部ソロモン諸島と東部ニューギニア方面であった。参謀本部は連合軍がニューギニア北岸づたいにフィリピンをねらうと予想し、海軍はこの方面を

奪取されればラバウルが危うくなると判断していた。連合艦隊は4月7日から16日にかけて、ガダルカナル島やポートモレスビー方面で戦ったものの、日本側に予想以上の犠牲が出た。17日にこの作戦の研究会があり、翌18日に山本長官はブーゲンビル島の南沖合いにあるバラレ島へ向かい、最前線で戦う将兵の士気を鼓舞しようとしたのであった。ところが山本長官飛来の情報は暗号解読によってアメリカ側へ筒抜けになっていて、長官機は迎撃されて黒煙と火をはきながらジャングルへ墜落したのであった。長官の死に国民は大きな衝撃をうけた。国民にとって山本五十六は「無敵連合艦隊」のシンボルであり、不滅のエースであったのだ（『太平洋戦争』242-244頁）。

ここでは「山本元帥の英霊に捧ぐる歌」として31人の競作があり、よしたかは「まなさきは」と題して15首を載せる。最初の3首をあげる。

まなさきは眩<sup>くら</sup>みたちまちぬばたまの極りもなき  
ことはの闇

蒼々と光りたゆたふ南海の空にさくらの花の  
かがよふ

元帥の称号をはた国葬を賜ふみかげにむせび  
いまさむ

また、よしたかは「人としての山本元帥」を4頁にわたって書き、その素材は「何人かの人々によって語られた新聞の報道による」と明らかにしている。

第12号には「比島独立」として3首ある。

アギナルド老將軍よながらへてこの飲びに旗  
をかかぐる

老いの眼に飲びあまる涙もて輝く旗を仰ぎた  
りけむ

あめつちの道にぞ忖るあめりかのありとあら  
ゆるものよ退き行け

日本とフィリピンの関係は、「南方第一段作戦」として「マライ作戦とフィリッピン作戦が主要な



【図版7】『台湾』第4巻第7号「絵と文 山本元帥頌」、「痛憤アッツ島の歌」。

もので、東亜における米英の根拠を覆滅するのが主目的であった」、「第四師団（上海）およびその他の歩砲兵部隊によって増強された第十四軍は、四月三日からバタン陣地に対する総攻撃を開始し、九日までに全半島を攻略、五月七日コレヒドールをも占領した」のであった（『太平洋戦争陸戦概史』56-58頁）。

「アギナルド老将軍」はエミリオ・アギナルド（1869-1964）のことであり、彼はフィリピン独立のためにスペイン、アメリカとも戦ってきたのである。日本のフィリピン占領によって、アギナルドは日本軍に協力したのである。渡辺孝夫著『フィリピン独立の祖・アギナルド将軍の苦闘』（福村出版、2009年）にも、当該時期のアギナルドの姿は「悠々自適の生活のようだ」（221頁）とあるのみで、遺憾ながら明確ではない。

「比島独立」について、すでに1941年1月21日に東条英機は閣議で「大東亜共栄圏の理想に努力する限り、出来るだけ早くフィリピンに独立を与えたい」旨の演説をなし、43年9月4日の国民投票で一院制の国会が選出され、この国会でラウレルが来るべき独立したフィリピン共和国の大統領となるとされた。このラウレルを大統領とするフィリピン共和国の独立が宣言され、祝典が行われたのは10月14日のことであった（守川正道『フィリピン史』同朋舎、1978年、254-255頁）。むしろ独立共和国といっても、日本の傀儡であり、その侵略性を隠蔽するものであった。

#### (4) 1944年（昭和19）

第5巻第1号には、「映画ホーネットの末路」と題して、

阿修羅なす荒ぶるみたま弾幕もものかは翺く  
る雷撃機見よ  
凄壮と言ひ必死といふもたたかひの息衝かし  
さの前に虚しき

必殺の魚雷喰へる刹那なり母艦をはふり落つ  
る飛行機

ホーネットはヨークタウン級航空母艦の3番艦である。太平洋戦争の緒戦に日本軍が一方的な勝利を得、意気大いにあがる連合艦隊は、第二段作戦の手始めとしてミッドウェー攻略を主張していた。そのころ、ハルゼー中将の率いるホーネットとエンタープライズは、巡洋艦4隻に守られながら、全速力で太平洋を一路東京に向かっていった。ホーネットにはドゥーリットル中佐の率いる陸軍双発爆撃機ノースアメリカンB25が16機搭載されていた。このドゥーリットル隊は東京、横須賀、名古屋、神戸を爆撃したのである。日本初空襲は1942年4月18日であった（『太平洋戦争』101-107頁）。

ホーネットは42年10月26日～27日のソロモン海域で行われた南太平洋海戦で撃沈された。映画はアメリカ側が撮影した戦闘中のホーネットのフィルム映像を日本側が押収し編集したものであると言われている<sup>(3)</sup>。

さらに「ブ島戦果」として、

相つぎて挙る戦果やアメリカの反抗といふ  
図をあはれむ  
艦艦や巡洋艦の数は挙げわがたは易く言あげ  
めやも  
未帰還や自爆の文字に灼けつきしわがまなじ  
りはほむら立ちたり  
屠り去る五十一艘海鷲の立つるいさをはま  
さに金字塔

とある。1943年11月5、8、11、13、17日、および12月3日のブーゲンビル島沖海戦のことである。連合艦隊は「虎の子」の第三艦隊第一航空戦隊（空母翔鶴・瑞鶴・瑞鳳）の艦載機を急遽ラバウルへ進出させ、基地航空部隊と協力の上ブーゲンビル島周辺のアメリカ艦隊に波状攻撃を加えたのであった。大本営はこれらの航空戦で大戦果をあ



げたと鳴り物入りで発表したものの、実態は過大な戦果報告であった（『太平洋戦争』258-259頁）。

第6号、第8号は戦争詠ではないが、よしたかの身辺を物語るものがあるので、あげておきたい。前者においては「身辺騷擾」として、

いつかまた帰り住む日もあるべしと思ひゐし  
家売ることにしつ

歌の友ちりちりゆきし花蓮港に今は用なし家  
は売るべし

家を売り職退きいまは憤しみておのれみづから  
ふりかへりみむ

二十五年の記者生活は下積みのあはれなりける  
願みをする

家売りと得たりし金は思ひゐし不義理果して  
淡々しけれ

東京より沼津に疎開せし父の侘しさ聞けば金  
を送らむ

とあり、さらに「父より三月二十八日善治伯父逝去を聞く」として、

はたち前後馬鹿<sup>ころつき</sup>不頼漢の痴れものを迎へたま  
ひしみ心想ふ

とある。

後者においては「山海旅情」と題して、「勇兄たまたま休暇を得、東部への旅にいぎなふ。同行を志し、七月二十四日宜蘭經由花蓮港へ向はむとせしが時化もよひのため見合せ、北投金山方面へ行を共にす。北投には次子らも従ふ」という詞書のもと、21首を掲載している。

花蓮港への旅に出はぐれ夏暑き湯場の北投に  
来てうだりをり

職いまだ定まらぬ身にゆく夏の風ぎわたりたる  
朝の磯風

かかる世に二日ばかりを打呆けて浜辺の家に  
勇とぞ居る

まず、この年をもって記者生活に別れを告げたこと、「二十五年」というのは1918年（大正7）に

台中の台湾新聞に勤務したことから起算すると合致する。花蓮に家を新築したことは、かつて『あぢさゐ』に記録された。その後、台東を経て台北に転勤してきたのであった。花蓮の家を売り、その売却費の一部を父に送ったこと、現時点では再就職にもいたらず『台湾』の主宰者である斎藤勇を誘って旅に出たのであった。

伯父の死を悼む歌は、よしたかの二十歳前後の放蕩を想起させる。1915年（大正4）に18歳で台南に行き、その後台中へ、20年（大正9）には与那国島で非嫡出子として真永が誕生、21年（大正10）には台湾新聞を解雇される。その理由を、よしたかは「あまり生活が放埒なため辞めさせられた」と記している（「若き日のことども一在台四十年短歌生活の思ひ出ばなし一」、『文芸台湾』第2巻第1号、1945年）。すなわち、この間の「放埒な」よしたかを伯父は迎え入れていた、その伯父への感謝と哀悼の念を詠ったのである。

さて第9号は「神風特別攻撃隊頌」に25名、「米鬼来襲の歌」に35名が競作している。よしたかは、前者の巻頭に10首を寄せている。

神風の名を負ひたりし若うどら今ぞ必死の時に  
翹ばたく

若草の燃ゆるいのちのさやさに征きてかならず  
帰ることなし

いよいよに国運を賭す時ぞよと一命弾となり  
で爆ぜ去る

身は爆ぜて神となりましきぐらにもゆるいの  
ちはおや国のため

そのきはのいのち思へばかくてあるわれは  
立ちても居てもあられず

殊更にけふあるを期す訓練の遂のその日と  
吹くや神風

まさに然り一人一人がすめくにのみ柱として  
負へるわかうど

たまきはる若きいのちはしろがねのほむらと

燃えて聖く久しく

ひたぶるに行き行くもののいさぎよき吾はた  
遂に老い朽ちにけり

発しては万朶桜若ざくらその壮烈に聴き惚く  
るのみ

とある。

戦局が絶望的抗戦の時期に入ったことを戦術面で象徴しているのが、神風しんふう（通称神風かみかぜ）特別攻撃隊の出撃である。航空機による特攻は、「単独飛行がやっとという搭乗員が沢山いる」現状では、「体当たり以外に方法はない」という大西瀧治郎中将の提唱によって始められた（『太平洋戦争』293-295頁）。『レイテ戦記』の著者の大岡昇平によれば「神風特攻は敵も賞める行動である。米軍のパイロットの七割は、自分も同じ立場にあったら志願するといっているそうである。当時銃後にあった若者たちはみな特攻散華の肚を決めていたという。しかし決意していることと、それを実行することの間には、また一線が存在するのである。沖縄戦の段階では学徒出陣の予備学生が大量に出撃して、『きけわだつみのこえ』『あゝ同期の桜』に見られるような悲痛の遺文を残した。その頃は志願とは表向きで、性能の悪い練習機による特攻が強要されるようになっていた。醜悪な基地の生活と特攻の美名の間には若い心を傷つける矛盾があり、こんどの戦争から胸をえぐる文字を残したのであった」、「しかも特攻という手段が、操縦士に与える精神的苦痛はわれわれの想像を絶している。自分の命を捧げれば、祖国を救うことが出来ると信じられればまだしもだが、沖縄戦の段階では、それが信じられなくなっていた。そして実際特攻士は正しかったのである。口では必勝の信念を唱えながら、この段階では、日本の勝利を信じている職業軍人は一人もいなかった。ただ一勝を博してから、和平交渉に入るといって、戦略の仮面をかぶった面子めんつの意識に動かされているだけで

あった。しかも悠久の大義の美名の下に、若者に無益な死を強いたところに、神風特攻の最も醜悪な部分があると思われる」となる（『レイテ戦記』（上）、中央公論社〈中公文庫〉、1974年、284-285頁）。

#### (5) 1945年（昭和20）

第6巻第1号「新年号」に、よしたかは「続浩然行」と題して17首を寄せている。その詞書は「十二日松嶺を発しマレッパに向ふ」、「マレッパにて」、「タイヤルの乙女より手織りの布二反を贈らる」、「十三日マレッパ発八里余を走破、霧社桜旅館に泊す。当初合歡越花蓮に到らんとする計画を急変し、埔里内茅埔を経て八通関越玉里に抜くべく十四日東埔泊、十五日八通関に向ふ」、「対関駐在所跡」、「十五日八通関泊、十六日新高主山を極め同日滞在、十七日花蓮港序下に入る」とあり、その旅程が窺い知れる。

ここには当然のことながら戦争詠はうたわれず、ここによしたかの真骨頂があると思われる。それぞれの詞書のもとの第一首をあげる。

寄るべなき雨はあがりてありあけの冴々しさ  
や霜のおくがに  
次高の雪にまむかふこのやどのにほころびか  
けしいちはつの花  
たをやめが思ひたぎちて織りにけむその思ひ  
をぞ纏きてい寝よ  
家あとをとどむるのみに桃さくらのま盛るかな  
し昼餉をしつ  
深苔の榎の林は残雪のくきやかにしてあやに  
明ろし

ここで行程を追ってみたい。第1日目、霧社の北方・松嶺を発ち、マレッパを経てタイヤル族の家に宿泊。2日目、マレッパから霧社に入り桜旅館に宿泊。3日目、当初は西進して合歡山(3410m)越えを企図していたが、計画を変更して埔里から内茅埔へ出て、東埔にいたる。4日目、東埔を発ち、

対関を経て八通関に泊まる。5日目、新高主山（現在の玉山、3952m）に登頂。6日目、花蓮港庁下の玉里に入ったのであろう。相変わらずの健脚ぶりである。鹿野忠雄（1906-1945?）に台湾高山紀行である『山と雲と蕃人と』（中央公論社、1941年）がある<sup>(4)</sup>。それに楊南郡が注を付した新版がある（文遊社、2002年）。楊の注からも「内茅埔は今の信義郷愛国村」、「内茅埔は、清朝時代の八通関古道上の砦で、ここから道は二つに分かれ、西へ行くと鳳凰を経て林圯埔（現・竹山）に至る古道主線、北へ行くと牛軋轆（現・永興）を経て集集、社寮まで至る古道副線となる。したがって、内茅埔は当時の入山口であった」（362-363頁）等々のことがわかる【図版8】<sup>(5)</sup>。

### 3. 『八重雲』掲載の戦争詠

本書は1944年（昭和19）1月1日に台北市の大木書房から刊行された、よしたかの個人歌集である。

刊行の意図として、「十三年台東へ転任から十八年六月『あぢさゐ』『台湾』への合同まで五年六ヶ月の期間を画して、『あぢさゐ』廃刊を記念し、また私の生涯の一期を記念する意味から」と述べている。収録した作品は、『あぢさゐ』及『台湾』に前記期間に発表した約二千首の中から、六百十二首、約三分の一」と記している（「巻末小記」）。

戦争に関わる歌としては、目次に「昭和十三年」の章には「古川雄士君戦死」、「従弟戦死」、「桑田友竹君戦死」、「昭和十六年」には「対米交渉」、「日ソ中立条約締結」、「対米外交交渉」、「大詔渙発」、「昭和十七年」には「珊瑚海大戦果」、「昭和十八年」には「山口中将加来少将戦死」、「アッツ島玉砕」、「讃頌山本元帥」等々がある。

以下、『あぢさゐ』、『台湾』との重複を避けなが

ら、あげていくことにしたい。

#### (1) 「古川雄士君常熟に戦死」

妻として新聞記者に語るらく恥しからむと氣を張れるらし  
戦死と聞き黒髪断ちし若妻は娘氣失せぬもの  
ごしあはれ

#### (2) 「十二年十月従弟西岡義仁常熟に戦死の報に接す」

戦ひは他ごとならずわが負ひ守りせし子さへ  
討死をせし  
はらわたを打貫かれ万歳を叫ぶ終りの声は咽れしと  
決死隊志願をせよと汝が父が言ひしいましめ  
守りたりしか

常熟は江蘇省の南部にあり、北は長江に臨む地である（『精選中国地名辞典』凌雲出版、1993年、381頁）。

#### (3) 「桑田友竹君戦死」

白萩に近く椅子よせ夕ぐれの思ひしづめば宮  
まうでせむ  
君がためまうでしこの高みなる夕べの景色秋  
めけるさへ

#### (4) 「英彦勝七に会ふ」

『あぢさゐ』掲載時は「英彦に逢ひまさるに逢ふ」であった。

浅墓に陶磁の識りを語りたる虚ろごころに別れたりける  
台南駅に別れむ汽車は幸に上り下りの窓はま向ふ  
女学生の仲よき友が別れなむいたみに似たり  
別れともなき

#### (5) 「対米交渉」

いくさする身ぶりのみするアメリカに欠けたるものの在るを知らざる

#### (6) 「三月十三日日ソ中立条約締結」

若笹のそよぎや更に明るけれ松岡外交祝ぎ

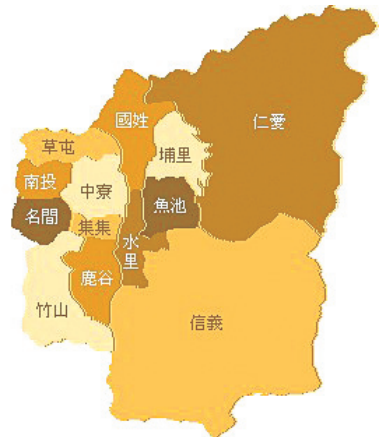


【図版8】台湾中部の地名についての古今対照表

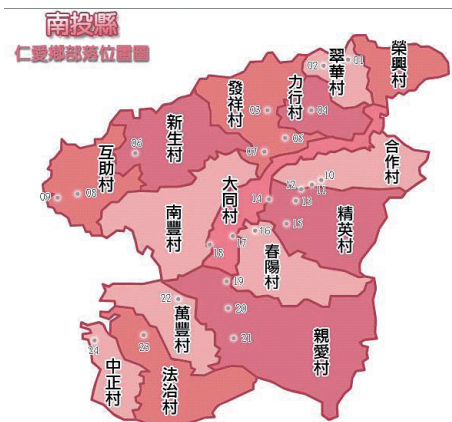
項目	旧名	現在名	地 址	標高	説 明
一	松嶺	松柏嶺	南投縣名間鄉	400M	1. 受天宮を中心にして、二百余りの商店がある、 2. 当地は茶が有名で、前大統領蔣經国によってこの茶は松柏長青茶と言われている。 3. 人口は約1549人（1999年まで）である。
二	マレツバ	馬烈霸	南投縣仁愛鄉力行村	1400M	タイヤル族の村。
三	八通關	八通關	南投縣信義鄉	2800M	1. 台湾の山脈南北、東西走向の交差点である。 2. 台湾の中心点ともいえる。
四	東埔	東埔	南投縣信義鄉東埔村	1200M~1300M	1. ブヌン族の村。 2. 東埔温泉で有名 3. 玉山國家公園の門 4. 八通關古道東の入り口（注）
五	對關	對關 （駐在所）	南投縣信義鄉	2094M	1. 東埔から10.3KMの所にある。 2. 現在はコンクリートの遺跡が残るばかり。
六	玉里 （南安）	玉里	花蓮縣玉里鎮		1. 旧名は璞石閣 2. 八通關古道西の入り口

注：八通關古道は清代（1875年）に開通した歩道で、全長は152KM、南投縣竹山鎮から花蓮縣玉里鎮までである。日本時代（1919年）に開通していた道路は八通関越横断道路と言い、34の駐在所が設置されていた。以上二つの道路は全く同じではない。（實地学講師 李鏡清作製）

左記の地は大半南投県にあり、各地の位置をよりよく理解するために、以下三つの南投県の地図を参照すると便利である。



台湾南投県の地図 (1)  
<http://travel.natou.gov.tw>



台湾南投県仁愛郷の地図  
<http://www.rennai.gov.tw>



台湾南投県の地図 (2)  
<http://nantou.network.com.tw>

- \* 松柏嶺はこの地図の西の松柏嶺風景区にある。
- \* 東埔(温泉)は南にあって玉山国家公園の東北方にある。
- \* 八通關古道は玉山国家公園の東にある。

て酌まむよ

(7)「対米外交交渉」

おづおづとわが鼻息をうかがひつ<sup>わるざれ</sup>悪戯をせよ  
今に魂消<sup>たまげ</sup>む  
なすまにまかせてあればをさな子の戯れつ  
のる愚かさに似つ

(8)「大詔渙発」

声をかぎりわが渙ばむぞ堪へ堪へて奔りたる  
いきどほりこれ  
実にげにとうべなふのみぞ戦艦をうち沈めたる  
戦果かがやく  
能はざることすら敢てなしとぐる顧みはせぬ  
ますらをのとも  
すでにしておのれを超えていと崇<sup>たか</sup>きいのちの  
光しゃにかがよふ  
今さらにみいづのほどを思ふなりかたじけな  
くてものを言はれぬ  
いかばかりみむね安らぎましけむぞ思ひまつ  
りて涙こみあぐ  
基地に目と鼻さきの台湾に飛び来ぬまでに制<sup>おさ</sup>  
へおほせり  
みなざらふ太平洋の海もせに作戦構想の雄大  
を見よ  
あきらかに世界人類銘記せよアジヤの民に代  
りてぞ断つ  
東郷を継ぐもの山本提督が断乎<sup>くだ</sup>と降す撃ての  
命令  
にこやかに海のみ親の東郷が山本を讃<sup>ほ</sup>めたた  
えぬまさむ  
東郷が日本海にかかげしにむべなぞらへてか  
かぐZ旗

「大詔渙発」は、中国との戦争の泥沼化がもたらした閉塞感を一挙に吹き払う効果があった。ただ、それについても、坪井は厳しく問い質す。すなわち、「詔勅のことは《神の御声》あるいは《神霊》として神聖化される」、「ラジオや新聞などの〈情

報〉を通して、大本営（そして天皇）と詩人たちの間に無媒介にネットワークが敷設されていることが見て取れるであろう」、「ここで示されているような〈情報社会〉においては、与えられた〈情報〉の価値の計測や多義的な解釈は無用であり、受信者は条件反射的に即座に反応することが期待される。氏はそこではいわば国家や天皇に対する宣誓の意味合いを帯びてくる」と（『声の祝祭』185-186頁）。ここでは、よしたかの歌を通して坪井の論理が素直に入ってくる。

(9)「珊瑚海大戦果」

若笹の葉ぬれの露のま珠なすかがやく戦果海  
のかなたに  
若笹の窓べに遠く思ひつつ賜びし新茶の封切  
りにけり  
木麻黄の秀つ枝に朝の風は見えかたじけなさ  
の臉（まぶた）うるほふ  
絵巻物くり展げたる華かささつきの海に競ふ  
ますらを  
制へ得ぬ飲びの朝白ゆりのひとつ聞きて庭面  
さやけし

(10)「山口中将、加来少将の壮烈を悼む」

もののふがみ艦<sup>ふね</sup>と運命<sup>さだめ</sup>共にせむ決意を何とた  
たふべからむ  
のがれ得るいのちを敢えて艦と共に帰らじと  
するもののふのみち  
大君のみ艦あづかる責もあれや艦を離れがた  
く思召しけむ  
ますらをがみ艦と共にせむいのち思ひ極めて  
あなさやかなる  
わだ中に大<sup>ほら</sup>き洞なし沈む艦の渦に汲はれて神  
あがり給ふ  
親艦のいまはのきわと駆逐艦あなかなしもよ  
ひしと寄り添ふ  
三千とせの恨はらさむさがけと勇み立たせ  
しその臨終や

これは第二航空戦隊司令官・山口多聞少将（の中中将）と空母飛竜艦長・加来止男大佐（のち少将）が42年6月5日にミッドウェー海戦で戦死したことを悼む歌である。

日本軍が緒戦において西太平洋を占領すると海軍はオーストラリア占領を計画したが、対ソ戦の戦力を保持しようとする陸軍が反対したので、ニューギニアのポートモレスビー攻略計画とフィジー、サモア、ニューカレドニア諸島占領計画を立て、アメリカとオーストラリアを結ぶ輸送路を遮断しようとし、さらに短期決戦としてミッドウェー作戦でアメリカ太平洋艦隊を一挙にたたく作戦であったが、日本軍の大敗北に終わった（『アジア・太平洋戦争』186頁）。

(11)「アッツ島の玉砕」

一兵の増援乞はずすでにして玉と散らなむ覚  
悟なりけむ  
つぶさかに敵情通報終りてぞ残る全員突込み  
りはや  
傷つけるもの病めるもの自決して全員玉と砕  
け散りける

1943年5月12日、アメリカ軍1万1000名の上陸により戦いが始まり、山崎保代大佐以下2638名の守備隊は勇猛果敢に戦ったが、次第に追い詰められ、大本営からも見放され、30日に大本営はアッツ島守備隊が「玉砕」したと発表する（『太平洋戦争』246-247頁）。

黒羽清隆は「『玉砕』という語は、統帥部の無能・無力（大江志乃夫『日本の参謀本部』一九八五年）にもとづく『うつくしく』もなんともない悲惨な全員戦死の代名詞として、広大な日本軍占領地域のあちこちのドラマに用いられてゆく。少数のアッツ島生還者は、いわば息をひそめて、『戦後』を生きてゆかなくてはならなかった」と語る（『太平洋戦争の歴史』講談社〈講談社文庫〉2004年、272頁／なお初版は1985年に講談社現代新書とし

て上下二巻で出された）。

(12)「讃頌山本元帥」

まかがよふみんな見の空彩雲のみ霊をつつみ  
あはれいざよふ  
さつき闇なきよぎりたる五位さぎの消えしこ  
わねのとはの虚しさ  
蒼々と光りたゆたふ南海の空にさくらの花の  
なづさふ  
蒼々と明ろき夏の南海にいざなひたまふ壮嚴  
のこゑ  
国葬を賜ふがほどに大君のなみなみならぬみ  
むねなりけり  
まさやけき光りをなして八紘おほふ世界の山  
本のみ名  
み光りはとことはなれど飛行機の上のいまは  
のきわぞきびしき  
太平洋断じて泰くあらしめむ願ひにもえて燃  
え果てましつ  
阿修羅なす不動明王燃え立てるいかりのほの  
ほをさめたまひつ  
代へがたき人とおもふに有り得べき事かなわ  
れの脚はよろばふ  
作戦の構想雄偉いふなけれ嘗て人類のくはだ  
てを絶つ  
双眼鏡手にし給へる白服の神々しさはただな  
らぬかも  
引き給ふみ唇は固き決意もて生き死に超ゆる  
深きしづけさ  
神に代る義しきゆゑにいかづちのとどろにさ  
やに降る命令  
小学校中学校の先生にもつぶさに篤き道を踐  
ましき  
一瞬に世界一意の海軍となりしひりつはとは  
にゆるがぬ  
偉いなるもの慎しみ深く黙ふかく行くや断じ  
て打ひしぐなり



東郷を継ぐもの山本元帥が放ちたまへる大き  
みひかり  
一機また一機とび立つ若鷺に見慈しみの熱き  
まなざし  
太平洋に相まみえてぞ優劣をあかさむと<sup>の</sup>宣る  
絶対の信  
部下あまたしづく千ひろのわだつみを恋ふが  
に血しほ垂りましにけむ  
乞はれける書に尚添へてその母を慰めむとて  
御製書かしつ  
良寛のおろけさに似てわらべに返しの文を書  
かしけむかも  
いたいけのわらはべにさへ返し文書かであら  
れぬそのやさしさや  
梅雨ばれの野山もさやにくまもなきこの明る  
さに大きみはふり  
おほいなるみたまいよいよ神あがりまします  
かな梅雨ばれの空<sup>は</sup>  
おのれらの日々を愧らてよひとときも必死に  
生きて君につづかむ  
虔<sup>とほ</sup>しみて詠みまつらなむ斯くてだにわが鈍り  
たる命<sup>とほ</sup>徹れよ

#### 4. その他

『台湾時報』（台湾総督府編集、台湾時報発行所）  
昭和20年2月号に、「寒月」と題する7首を寄せて  
いる。

ただよへる雲はしづみて凍て果てし寒月<sup>い</sup>冴ゆ  
る浄玻璃の空  
たたかひの重圧ひしと身に沁みていのちに徹  
る寒月の冴え  
これやこの寒月冴ゆるあかつきのさやさやに  
して世界戦ふ  
あかとときのかたぶく月<sup>しゅんぎく</sup>は茼蒿におきたる露に  
照りて凜々しき

生きのこる者のみ遂に勝ち残るきびしさぞ沁  
むありあけの月  
<sup>かむろぎ</sup>神域を犯しまつりしいきどほり沁むばかりな  
るありあけの月  
飽くまでも冷厳にして戦はむはろけさに澄む  
ありあけの月

大日本帝国崩壊直前、如何ともし難い戦況下  
におけるよしたかの心中である。

#### 5. 小考

この一年ほどの間にも、詩人の戦争責任に関わ  
る記事を、私は二編目にした。

一つ目は『毎日新聞』2010年1月13日付、「詩で  
よむ近代 三好達治」である。「測量船一天性の才  
と戦争賛美」の見出しのもと、大井浩一は、まず  
「〈捷報いたる／真珠湾頭に米艦くつがへり／馬來  
沖合に英艦覆滅せり〉（「捷報<sup>いた</sup>臻る」部分）」を引く。  
ついで「今読んでも目を覆いたくなるような戦争  
賛美の『詩情の枯渇した作文』（石原八束）を次々  
に書いたのだから、とりわけ戦後詩人たちから攻  
撃されたのも無理もない」、「中でも、最も強烈な  
批判を浴びせたのが鮎川信夫（1920～86）である。  
鮎川は三好を『戦争を自然現象のように肯定して  
歌う』『反思想的な自然詩人』と規定し、その感覚  
には『吐き気を催す』とまで記した」と述べる。最  
後に『『フランス文学から学んだ近代感覚と、漢詩  
とりわけ唐詩のリズム』（高橋和巳）を兼ね備えた  
一級の詩人が、なぜあのような戦争詩を書いたの  
か。この問いがいかにも居心地の悪い謎に感じら  
れるのは、それが『日本人』そのものの謎として、  
いわば自画像を突き刺し、ゆがめるからではない  
だろうか」と問題提起を行う。

二つ目はまど・みちおが戦争に関わる詩、すな  
わち「この戦争は石に<sup>かじ</sup>嚙りついても勝たねばなら  
ないのだよといへば／お前はしづかに私のかほを

見まもり／ふかい信頼のまなざしでうなづきかえず（後略）」を書いたという報道がなされた。これは『朝日新聞』2010年11月6日付であり、白石明彦は「岐阜聖徳学園大の中島利郎教授（台湾文学）が見つ、同大外国語学部編『ポスト／コロニアルの諸相』（彩流社）で今春発表した」、「戦時中は三好達治や高村光太郎ら大半の詩人が戦争詩を書いた。メディアの責任もある」、「戦争詩を書いた詩人のほとんどは戦後、作品を闇に葬り、口を閉ざした。書いた経緯を明らかにした詩人は高村光太郎や小野十三郎、伊藤信吉らわずかで、まどさんほど強く自己批判した詩人はいない。鮎川信夫が半世紀前に指摘したように、問題は戦争詩を書いたか書かないかではなく、書いたことを隠したり、弁解したりして反省がない点だった」と述べている。

坪井秀人は、「十五年戦争下、とりわけ〈大東亜戦争〉開戦以降の、詩人たちが〈総動員〉に依ってゆく過程に釈明を立て、過程そのものの抹消を図ろうとする動きが跡をたたぬ」、「戦争詩は省いて当然という約束事が公然とまかり通ってきた」、「これらの例から見えてくるのは作品のテキストに作者の意向が優先されるこの国の文学風土である。〈書く〉こと（書かれたテキスト）はかりそめの、暫定的な表現の結果に過ぎず、作者の肉声（内面の声）を正確に伝えるものではない、だから不正確な痕跡はいつでも消去したり修正することが出来るのだ」と糾弾し、「戦争詩論はしかし拙劣にして醜悪な〈屑詩〉の山と対面しなければならない。屑は屑ゆえに戦時下の粗悪な紙とともに朽ちてしまえばよいのだろうか」と問いかけるのである（『声の祝祭』159-161頁）。ここでは、日本の文学風土のみならず日本人そのものが問われている。

日本古代中世史の研究者でもある阿部猛は、『近代日本の戦争と詩人』（同成社、2005年）をものし、

「わが国の『近代詩』なるものが脆弱な基盤の上に築かれていたことを私どもは直ちに思い知らされる。大陸における一発の銃声やハワイ真珠湾における成果の報道が詩人たちを狂気に陥れた」と指摘する（1頁）。また戦争責任については、「戦後の処し方は人によってさまざまであるが、およそ三つのタイプに分けることができる。第一は、高村光太郎の如く、きびしく自己を罰しようとしたもの。第二は、三好達治の如く、自己批判を欠くもの。第三は、例えば亀井勝一郎の如く、『一億総懺悔』を説くものである。一は壮烈であり、三は見事な居直りである。これに対して三好の如き処し方はもっとも平均的である。しかし、三好達治は高名なる詩人であって、裏長屋の熊や八とは違うのである」（161頁）と述べている。

本稿は渡辺よしたかの戦争詠を集めたものである。これらの歌をどのように評価するか、という問題がある。よしたかは戦争詠を隠し立てする風はなかった。ただ、戦後『碧き湖』（あぢさゐ社、1964年）を刊行した際、「『八重雲』刊行後の約十五年間ほどの作品は、作歌意識の不徹底を感じ一切採らず、三十巻から三十七巻末までの「あぢさゐ」誌上発表作から選出した」（206頁）と記している。すなわち1944年（昭和19）から1955年（昭和30）までの歌を切り捨てたのである。よしたかの終戦直後の歌から判断すると、これは時流に即した歌を捨て去ったかの感をいだかせる。また、鮎川が三好を批判した「戦争を自然現象のように肯定して歌う」面は、よしたかにも色濃くある。よしたかは一般庶民のごとくラジオや新聞からの情報に一喜一憂しながら、その情報を切り取りつつ歌を作ったのである。「愛国百首」等々、先頭にたって詠ってしまう。坪井流に言えば、よしたかもまた〈屑詩〉を量産したといえるであろう。

よしたかの人間性は、台中のバナナ園を管理していたころ、現地の人々との交流から窺い知れる。

彼らは高山族の人々であろう。後年、よしたかは「文字も書けない自然のままの原始のようなその人々、日本人ではないその人々、そういう人々の愛がまだ私の中に生きてゐる。そのように、その人々の中にも私もまだ生きてゐるはずである。哀れかなしく美しき人々よ」と記しているのである（本編（上）44-45頁）。それにもかかわらず、既述したごとく「高砂族」を「醜草」から「今は大みたからぞ」と詠ってしまう落差をどのように考えるか。

まず、よしたかの歌に戦争への批判が全く見られないのは何故なのか。戦時中という特異な時代であることを差し引いても得心がいかない。しかも、よしたかは新聞人なのである。新聞人としての常識を有していると考えるのが普通であるのに、その片鱗さえ見て取れないのは可笑しいと言わざるをえない。櫻本富雄は、「言論統制下にあった戦中の新聞は軍部の宣伝紙となって、事実でない報道をした」、「それによって国民の多くはだまされ、戦争協力に走った」と述べる（『ぼくは皇国少年だった—古本から歴史の偽造を読む—』インパクト出版会、1999年、46-47頁）。よしたかは、その程度の新聞人だったのだろうか。

ここで想起することがある。過日、頼衍宏と懇談した折り、頼は「よしたかがもっと広い世界に出て切磋琢磨していたら、もっと大きな歌人になっていたのではないか」という意味のことを語った。たしかに一理ある発言である。しかし、よしたかは『あぢさゐ』創刊10周年を記念して、歌集『あけぼの』を刊行した際、『あらたま』の創刊者のひとりである浜口正雄は、「渡辺さんが『あぢさゐ』を外に出さないといふ意図がよく分るやうな気がする。現今の歌壇の悪風潮に染まらしたくないといふ、一図さからこういふ拳に出てゐるものと思はれる」と述べている（本編（上）49頁）。私が『あぢさゐ』を通読して感じることは、

花蓮港あつての『あぢさゐ』であり、良きにつけ悪きにつけ、そこに『あぢさゐ』の独自性があることである。

一方、よしたかが中央との繋がりを持っていたのは斎藤茂吉である。茂吉に『あぢさゐ』を送り、「台湾に於いてこんな雑誌が続行されているのは驚異である」と賞賛され、その後茂吉は「必ず自筆の年賀状をくれた」とも記している（本編（上）51頁）。その茂吉は、「『アララギ』を守るという至上命題のために、どうしても茂吉に前面で皇国主義と戦争賛美の旗を振ってもらわねばならなかった」と土屋文明をして振り返らしめている著作もある（内田宜人『土屋文明—その昭和史の風景—』續文堂書店、2009年、202頁）。まさか、よしたかは茂吉のひそみに倣ったわけではあるまい。

また台湾で『南台短歌』を主宰していた小林土志朗に「渡辺よしたか論」がある。小林はよしたかの「独自の風格、その特異性」について、「私は之を世俗的の現実主義的傾向とロマン的リリシズムの微妙なる融合混淆にありと考へたい。勿論この二者が別々の表現をとり、或ひは逸脱して低俗な市井人の独白、古調の味気なさとなる場合もないではないが」として、「氏の本来の性格は、この二者を相当高度に発揚して余すところがない」と述べる（『台湾』第4巻第3号、26頁）。小林の評言を借りれば、よしたかの戦争詠は「低俗な市井人の独白」となるであろう。

よしたかの真骨頂は戦争詠にはない。しかし、よしたかは戦争詠をうたったという事実は厳然と存在する。私たちは、その事実をきちんと見つめる必要があるのだ。

## おわりに

私は戦争に関わったことで、その人のすべてが否定されてはならないと考えている。私たち、多



くの凡人は容易に時代の波を越えては生きられないものである<sup>(6)</sup>。では、如何に生きて行けばよいのだろうか。

阿部猛は、家永三郎の『戦争責任』（岩波書店、1985年）の第七章「今日において、私たちにとりもっても有効で生産的な戦争責任究明の方法は、何よりもまず責任を負うべき事実の正確でかつ詳細な認識と厳格な論理構成による法律的・政治的・道徳的責任の認定を、一人でも多くの国民の努力を結集して達成する作業から始められるべきであろう」（390頁）という言説を引用する。それを踏まえて、阿部は「考えようによっては、手ぬるい、迂遠な途のように思われるけれども、ひるがえって考えれば、将来に向けてもっとも手堅く有効な方法は、事実の発掘と伝承ともいい得るのである」と提言する（『近代日本の戦争と詩人』252頁）。

本稿で、私はよしたかの戦争詠は情報を切り取った、〈屑詩〉の感を否めないと述べてきた。その回答のさらなる吟味を、よしたかの戦後の生き様に求めたいと考える<sup>(7)</sup>。

しかし、その前に本稿の続編として、よしたかは如何なる歌論、文芸観をもっていたのか。そして「国民皆詠」を鼓吹した。それは『あぢさゐ』や『台湾』誌上で表明されている。次稿の課題をそこにおいておきたい。

## 註

(1) 奥山正武は「歴史学者の不参加」の見出しのもと、「防衛庁の戦史室が開設されたのは戦後八年も経た昭和二九年で、『戦史叢書』の配本があったのは昭和四一年、すなわち終戦から約二〇年後のことであった」、「それらの作業は、戦争のことにはふれたくないという当時の国民感情から、容易ではなかった。学者の積極的な協力がえられなかったのもそのためのようであった」と述べる（『太平洋戦史の読み方』東洋経済新報社、1993年、29頁）。

しかし、そうではないと私は考える。それについて、まず蒙古襲来を事例にあげて少しく述べてみたい。蒙古襲来を「未曾有の国難」と表現するようになったのは、それほど古いことではない。蒙古襲来の研究史を紐解くと、江戸時代中期以降にロシア船の南下、すなわち外圧に伴ってこの事件のことが想起されるようになる（川添昭二『蒙古襲来研究史論』雄山閣出版、1977年、参照）。また明治初年以降の歴史教科書を概観すると、明治初年の記述は淡白なものであったが、日清戦争（1894～95年）、日露戦争（1904～05年）、満州事変勃発（1931年）、日中戦争勃発（1937年）、当該時期前後を画期として時局を反映しながら用意周到に記述が増幅していくのである（野口周一「東アジア世界のなかの蒙古襲来」『総合歴史教育研究』第37号、2001年／同「明治以降期歴史教科書における蒙古襲来小考」『共愛学園前橋国際大学論集』第2号、2002年）。それを受けるかたちで、例えば杉山正明は「戦後になると、今度は一転、異常な戦時中のリアクションとして、蒙古襲来に限らず、およそ戦争一般、もしくは軍事史にかかわるような研究・論述は、なかばタブー視された」と説く（『逆説のユーラシア史』日本経済新聞社、2002年、169頁）。

日本におけるこのような傾向は台湾研究においても同様であった、と私は考える。かつて私は「台湾については、まず国分良成の意見を紹介したい。国分は、この二十年来学会やジャーナリズムが台湾にあまり注目してこなかったことに触れ、『中国研究の世界では、台湾研究を行うこと自体が〈反共主義〉ととられたり、あるいは中国側の気分を損ねるのではとのタブーも一部では存在してきた』と述べている〈「台湾への正確な理解を」『朝

日新聞』1992年5月7日付)。しかし、これは決して一部で存在したタブーではなく、筆者の身のまわりでも右顧左眄する研究者には、このような傾向が看取された」と書いたことがある(野口周一「日本における地域研究の現状／中国研究」『地域研究入門』所収、開文社出版、1997年、48頁)。

戴國輝はこの点をさらに直截に指摘した。1970年夏頃の状態として「実に奇妙な雰囲気なかで日本の中国関係学会は『一つの中国論』を主調音にしていた。そして人びとはただ口先でそれを唱えるだけだった。はじめから『一中一台』論を主張する保守系は論外としよう。だが『一つの中国論』者らが、一方で『台湾は中国の一部である』を既定の前提にしながら、他方で、台湾を研究対象に選ぶことも、台湾への訪問をもタブー視する風潮を自ら瀰漫させ、政治に名を籍りたもつとも不毛な非政治的形式論理で自らの『頭』を金縛りにしていた。そのぶざまさは『奇怪』を通り越して実に痛々しかった。それらの人びとのうち、なかんずくイデオロギー過剰派の一部の人は、いとも単純に台湾からの留学生をば、機械的にそしてアブリオに『国府支持者』、『国民党の特務』、はたまた分離主義者グループによる『台湾独立派』と決めつけるお粗末な所業すら平然と行う有様だった。否、今なおその種の人がいるとも伝え聞く。彼らはこの種の非分析的『怠け者』の『論理』で、自らの『一つの中国論』(内実を著しく欠如させた空疎な代物でしかないのが一般だった)を繕い、『安心立命』して、与えられた『日中友好』の『温泉』にナルシストよろしく遊泳してはばからない。そして自ら不毛の環境を研究の場で無意識につくり上げるのでもあった」と厳しく問い質したのであった(「序—霧社蜂起事件の共同研究について—」『台湾霧社蜂起事件—研究と資料—』所収、社会思想社、1981年、2頁)。

- (2)「醜草」で想起した歌は、武藤章(陸軍中将、終戦時比島第十四方面軍参謀長)の「醜草のおどろが中のむくろをも神の光はいつか照らさむ」である(『大東亜戦争詩文集』新学社〈新学社近代浪漫派文庫36〉2006年、181頁)。しかし、高山族と武藤では語句の用い方のみならず、その存在において比較にならない。

武藤については、「一九二〇年代末、陸軍内部に現れた秘密結社(「無名会」「一夕会」など)の主なメンバーである石原莞爾・板垣征四郎・鈴木貞

一・小畑敏四郎・根本博・武藤章・永田鉄山・東条英機・岡村寧次・山下奉文・磯谷廉介<sup>いそがやれんすけ</sup>などがしばしば集まって、『満蒙問題』について検討を行った」(「彼らは軍ファシズム運動の根幹であり、九・一八事変による『満蒙』侵略と、のちの全面的中国侵略戦争の張本人であり、積極的な推進者であった」と説明されている(万峰『日本ファシズムの興亡』〈東アジアのなかの日本歴史 第10巻〉六興出版、1989年、129頁)。この九・一八事変は、日本でいう柳条湖事件のことである。

- (3) この映画とは、『日本ニュース』第177号「決戦」をさす。その映像の字幕に、「昨年十月廿六日、南太平洋海戦に於いて、吾が海軍航空部隊は、敵空母集団を猛襲せり。本映画は米空母ホーネット艦上より敵側により撮影されたるものにして、故意に米空母の不沈性能をば宣伝せんとする編集の跡をみるも、右空母は本海戦に撃沈せられたる事実は、後日敵側も自ら発表せる所なり。本映画に依って吾々は近代戦の凄愴苛烈なる様相に接すると共に、南冥の空遠く、護国の華と散りゆく勇士の崇高なる姿を眼のあたりにし、吾が将兵の勇猛類ひなき攻撃精神に、襟を正し頭を垂れるものである」とある。なお、この映像を日本側がどのような経緯で押収したかは、現在のところ調べられていない。また、この177号には有名な「学徒出陣」の映像も含まれていて、1943年10月27日から映画館で公開された模様である。

- (4) 川村湊は、『台湾に魅せられたナチュラリスト 鹿野忠雄』(平凡社、一九九二年)という鹿野忠雄の評伝の中で、著者の山崎柄根(一九三九～)は、『これらの山行きは、名文で綴られ、格調が高い。台湾の山の『原始』に酔い、しかも自然を観照する姿勢が気持ちいい』とその文章を称賛している。そのことに異を唱えるつもりはないのだが、たとえば伊能嘉矩の台湾踏査日記と比べると、その伸びやかさ、屈託のなさ、いってしまえばその呑気さに、隔世の感を覚えるといってもよいほどだ』という批判を記している(『大東亜民俗学』の虚実』講談社、1996年、108-109頁)。妥当な見解である。

- (5) 柳本通彦は、戦後の台湾における台湾研究について「一九八七年の戒厳令解除、翌年の李登輝氏の総統就任によって、開放民主化が一気に進み、台湾に関する研究が堰を切ったように始まった。しかし、『台湾研究』には戦後半世紀に及ぶブランクがあった」と述べ、柳南郡については「史学

はもちろん生物学から地質学、人類学、民俗学に至るまで、各方面の台湾研究が、日本統治時代の文献や研究者の著作を紐解くことから始まったのはやむをえないことだった。とくに山地研究は困難を極めた。たとえば地名が、戦前と戦後ではまったく変わってしまっていた。日本語の文献に登場する山や河が、現在の地図上のどこを指すのかさえ、若い学者には容易にわからなかった。「こうして、日本語による文献をことごとく読破し、実際に現地<sup>現地</sup>に足を運んで検証していた楊南郡氏の存在がクローズアップされることになる。日本統治時代、日本の研究者が台湾の山地で行ったフィールドワークの記録は、あらゆる分野において、台湾研究のスタートラインとなるものだった」と高く評価する（『台湾研究と楊南郡』『山と雲と蕃人と』所収、文遊社、2002年、428-429頁）。

- (6) 例えば、研究者の懊悩を「張りめぐらされた警察と軍の監視下で、学的良心を貫くのは至難のことであった。調子に乗り、お先棒をかついだ御用学者は論外であるが、多くの人びとは暴力に屈せざるを得なかったものであり、自己の主張を枉げざるをえない苦悩を味わった。まして研究成果を書物として刊行しようとするれば、戦時中は用紙の割り当て制度が存在し、『不急不用』の著作には紙がもらえなかったものであり、いきおい、心ならずも戦争協力のポーズをとらざるをえなかったことも理解できる」と説明するものもある（阿部猛『太平洋戦争と歴史学』古川弘文館、1999年、13-14頁）。
- (7) 坪井秀人は、代表的な戦争詩人について「〈彼は戦争詩を書いたがそれによって彼の詩業の価値は些かも損なわれるものではない〉式の評言がいまだに繰り返されている。このような見苦しい弁明が戦争詩と同様あるいはそれ以上に罪深いことをまず認識すべきなのである」と断罪する（『声の祝祭』161頁）。

〔付記1〕『あぢさゐ』や『台湾』の収集において、今回もまた呉欣芳氏（東呉大学兼任講師）に言葉に尽きせぬ程お世話になった。ここに深甚なる謝意を表したい。

〔付記2〕本稿中、『日本ニュース』については佐藤知条氏（ソニー学園湘北短期大学講師）に、台湾中部の地名の比定については李毓清氏（實踐大学講師）にご教示いただいた。ここに謝意を表しておきたい。

〔付記3〕2011年3月4日～5日、花蓮の地を訪れ、『台湾四季一日掬時期台湾短歌選一』（台北市・二魚文化事業有限公司、2008年）の訳註者である上田哲二氏（慈済大学准教授）と詩人・陳黎氏にお目にかかり、お話をうかがうことができた。陳氏と写真家・邱上林氏には、花蓮の旧市街を昔の写真を参照しつつご案内いただき、『あぢさゐ』に詠われたここかしこを彷彿と再現させていただいた。陳氏と邱氏の花蓮を愛する純粋な熱情にただただ感嘆した。また本学事務局長・松岡良樹氏にご同行いただき、ご支援をいただいた。ここに四氏にも心から御礼を申し上げる。



左より陳黎、邱上林、松岡良樹、ひとりおいて上田哲二の諸氏。



〔付記 4〕 3月5日には、頼衍宏氏（銘傳大学准教授）のご紹介により、たまたま開催されていた台北コスモス会（於国富大飯店）に出席した。台湾の地に蒔かれた日本の短歌の一齣を目の当りにし感慨深いものがあった。

頼衍宏氏のご説明によると、「呂蔡啓愉が一人で『コスモス』に入っていたので、『からたち』台北支部解散直後に范姜房枝らも『コスモ

ス』に入った。やがて范姜は初代台北支部長となり、『華麗島歌集』（1991年）を出版。范姜歿後、支部長を引き継いだ北条千鶴子は『華麗島歌集（二）』（2010年）を上梓。その後、歌歴・句歴ともに長い台湾生れの李錦上が支部長として、正会員10名、名誉会員1名、準会員8名、ゲスト1名を率いる」となる。



前列、左より筆者、李錦上（コスモス短歌会台北支部長）、北条千鶴子、劉智恵の諸氏。筆者の斜め左隣に林美氏、後ろに沈美雪氏。最後列、左に頼衍宏氏。

〔付記 5〕 2010年（平成22）7月24日、歌人の浜口英子氏（本名：エイ）が享年104歳の長寿を全うされた。氏は本稿にも登場する『あらたま』の創刊者の一人である浜口正雄氏の夫人である。茲に謹んで哀悼の意を表するものである。

ここで英子氏の戦後の歩みを簡略に記し、その遺徳を偲びたい。氏は1946年（昭和21）3月に台湾から郷里・長崎県西彼杵郡三重村に引き上げ、父の生業・鮮魚仲買商の手伝いをし、かつ畑の開墾もして糊口を凌いだ、という。氏の作歌活動は、三重村で土地の有志を指導することにより再開、52年（昭和27）1月には十六夜会を組織、歌誌『いざよい』を創刊、まもなく『なぎさ』と改題した。63年（昭和38）、横浜市綱島にある長福寺幼稚園に管理人として勤務、一室を借りて長男透氏と四女蓉子氏とともに過ご

した。この横浜移転により『なぎさ』は、『あらたま』同人であった国枝龍一氏の『草原』に合流した。国枝氏歿後、英子氏が『草原』を継ぎ、亡くなるまで『草原短歌会会報』編集人の労をとられた。英子氏の本稿に関わる歌を1首紹介したい、「血の色に霧社の桜は咲くと言ふ誰か記せし時の事件簿」（『草原短歌会会報』第127号、2010年2月）。

2010年4月、私の湘北短期大学の教え子が、前述の長福寺幼稚園を自ら探し出し勤務することになった。私と浜口家の関わり、まさに奇縁というべきであろう。

なお、英子氏の事績については、堀田武弘著『長崎歌人伝 ここは肥前の長崎か』（あすなろ社、1997年）にまとまった記述がある。参照されたい。

On the War Poetry of Yoshitaka Watanabe  
*Tanka* Poet Yoshitaka Watanabe : His life and literary works (Part 3)

NOGUCHI Shuichi

**【key words】**

Taiwan, WATANABE Yoshitaka, War Poetry, *Ajisai*, *Taiwan*